

「底が突き抜けた」時代の歩き方 307

両性具有の恍惚 - 白洲正子『両性具有の美』

映画『ヘドウィグ・アンド・アングリーインチ』について書く前に、『新潮』94.1~96.7にわたって連載された白洲正子の『両性具有の美』を手を取った。一回目は、エリザベス女王からその若さと美しさを愛されて、「けっして老いてはならぬ」と言明され、両性具有者として400年間を生きた青年貴族オルランドーを描いたヴァジニア・ウルフの同名の小説の映画化『オルランドー』に言及しながら、白洲は書く。

《両性具有とは、人間が男女に分れる以前のかたちであって、力強い男性神のヘルメスと、女性美の極致であるアフロディテが合体してできた言葉を「ヘルマフロディトス」と呼んだという。エジプトやギリシャの彫刻にいくつか見ることができているが、乳房とペニスを持った神々は、具体的にすぎて少しも美しくはない。日本では「ふたなり」と称し、鎌倉時代の病草紙に描かれているが、こちらの方は神さまではなく、人間であるのが醜悪さを通り越して哀れに見える。

してみると両性具有というのは、あくまでも精神的な理想像であって、プラトンのいう「アンドロギュヌス」と呼ぶのが適しているだろう。アンドロギュヌスは、あまりに完全無欠であったため、神に逆らうものとして男女二つの性に引き裂かれてしまった。その原初の姿に還ろうとして、男女は互いに求め合う。これが「エロス」のはじまりだということである。》

オルランドーは最初は男として生まれ、途中から女になるが、完全な両性具有者なら、一人の人間において両性を具備していなければならないのに、不自然であるという白洲は、《女に対しては男（セラフィトス）、男に対しては女（セラフィタ）として接し、男女を問わず人々を魅了》した人物を主人公とする『セラフィタ』という小説を書いたバルザックが、《二人の天使に見守られるキリストを両性具有者と考えていたらしい》ことを明かす。だが、その見方は別に珍しくはなく、ほとんどキリストしか描かなかった画家のルオーもまた、キリストを両性具有者と見ていた一人であり、《生ま身の人間の場合は、死ななければ完き両性具有には到達し得ないことを、『オルランドー』も、『セラフィタ』も、物語るよう》だと書く。

連載を追うと、いくつかの興味深い記述が散見される。《両性具有とひと口にいつても、ピンからキリまであり、天界の神々から地上のホモやレスビアンに至るまで網羅している。このうちレスビアンはしばらくわきへおいておいとくとして、岩田準一の研究によると、日本には男色の文献が二千近くもあり、その他の稚児とか陰間とかおかまな

どの名称は70以上を数えるという。男色は日本だけではなく、ギリシャ・ローマは元より中近東でも印度でも中国でも昔から盛んに行われたが、或いは宗教上の制約から、もしくは常民の生活から逸脱しているところに魅力があったのだろう。だが、そうとばかりもいえないのは、13、4から20歳前はたちの男の子には、誰が見ても人間ばなれのした美しさがある。それがわずか4、5年、長くて6、7年で消えてしまうところに物の哀れが感じられ、「燕」の趣味なんかまったく持合せていない私でさえ、何か放っとけないような気持になる。》

光源氏への目配りも怠っていない。《せっかちな現代人はとかく物語の筋だけ追うことに熱心だが、藤壺の宮と源氏の不倫の罪は、年月が経てば経つほど懊悩を増す性質のもので、それには長い時間が必要となる。筋だけ追っていたのでは、光源氏は単なる好色な楽道家にすぎず、影の部分にまで及ぶことはできないのだ。》「影の部分」に浮かび上がってくる光源氏に目を凝らすと、日本の独特な美意識に次のように言葉が寄り添っていく。《日本人は何を考えているかわからないといわれるのも、そういう言葉のあいまいさから出ており、黒白をはっきりさせすぎると日本語ではなくなる。自然の描写についても同様で、真昼間に残るくまなく見えるのは趣きがない。『源氏』に現れる時間は、夕暮か、月の夜か、明け方のほのかな光の中で、気候も秋のはじめか終り、春もたけなわを少し過ぎた夏のはじめの頃である。》

幽かそけきという日本語がある。わからないほど少しといった風情で、ほんのかすかのいい謂である。「秋の花みな衰へて、浅茅ヶ原も枯れがれなる虫の音に、松風すごく吹き合せたるに、その事とも聞きわかれぬ程に、物の音ども絶えだえ聞えたる。取り添へていと艶なり。」(賢木)という文章にみえる「物の音」について、《ここでは音楽のことをいっていると思うが、それさえはっきりとは聞えず、松風や虫の音にまじって、あるかなきかにひびいて来るのが「艶」だとい》い、《昔の人たちは、人にも物にも個性なんか求めず、周囲の環境といかによく調和しているか、そのことだけを美しいと見たのである。だから顔だちとか表情などは二の次で、立居振舞や風情の方に気を使った。たまたま「未摘花」だけが、雪の朝の日光のもとにその醜さをさらけ出したのも、逆にいえば白日のもとで女の顔など見てはいけないという教訓だったかも知れない。》と説明する。

さて、両性具有者について白洲は『源氏物語』の中に、《すべてがあいまい模糊として、その中から立ちのぼる幻のような存在に美しさを見》出し、《その頂点に立つ光源氏こそ両性具有者の最たるもの》と指摘する。男女の性もまた、「あいまい模糊」としており、その垣根の低さを乗り越えて、自在に行ったり来たりしていたのが光源氏であったからだ。見映えも考えかたも女性的であった光源氏に代表されるように、両性具有への一種の憧れが《女以上に女らしい男》へと傾いていく日本のありかたは、西欧のそれとは全く別物であることを、ジャン・コクトーの『白書』を読んで知り、ショックを受けたと記す。

《コクトーの挿絵は、前にもジュネの『泥棒日記』の特装本で知っていたが、実にギリシヤ的で、美しい。そこには日本の春画のような陰湿なものではなく、地中海の太陽と風にさらされた鋼鉄のような肉体が、誇らしげに男性の男性たる所以を赤裸々に顕示している。同じようにホモと呼ばれても、彼らの理想は完璧な男性になることで、女のような男ではないことを知った。》読後感として《残っているのは、ギリシヤの神々とキリスト教の間には、私たちが想像しているほどの距離はないこと、ホモでありながらキリストは信じていること、それになによりも肉体的な強さが、西洋の文明を造りあげたこと等々であり、その隔絶を跨ぎ越して我々の視線が西欧化に向かっているようにみえるだけに、《私はやはり『源氏物語』の陰影の世界がなつかしい。光源氏を白日のもとで裸かにしてみたいなどとは思わない。強いことは必ずしも強くはない。か弱く、はかないものには、それなりの辛抱強さと、物語に耐える力を神さまは授けて下さる。思想とか理念とか呼ばれるものを、それとは程遠いあいまいな日本語を用いて、たどたどしい文章で書くことを私は少しも恥じてはいない。》

折口信夫が弟子に迫って、抵抗された時に、「お前は優秀な弟子なのに、わたしのいうことを聞かないと、わたしのほんとうの思想は伝わらない。伝統とはそういうものなんだよ」と悲しそうにいったというエピソードについても、こう触れられている。

《人はこの著名な碩学にはあるまじき振舞だということかも知れない。また学問はそんなものではないとさげすむであろう。だが、私はそうは思わない。先生はほんとうのことをいわれたのだ。究極のところ、伝統というものは肉体的な形においてしか伝わらない。でなければ、「血脈」というような言葉が生れた筈もない。兼好法師は徒然草の中でこのように語っている。

「男をとこ女をみなの情なさけもひとへに逢ひ見るをば言ふものかは。」

男女の情というものは、現実に出会うことだけが重要なのではない、と記したあとは括弧づきで、 - 逢いたくても逢えないでいる方がいっそう哀れが深いし、男女の情というものが身に沁みてわかる、そういっているのである。

たまたま折口さんはホモだったために直接行動に出るしかなかったのであろうが、それはそれとして伝統についていわれたことは真実である。魂と魂が歩みよって、触れ合った瞬間、人は感電したようなショックを受ける。先生はそういうことを身をもって示したかったので、私にはその切なさがよくわかるような気がする。》

折口の気持も、白洲がいわんとすることも手に取るようにわかる。弟子になる以上はそこまで突き越えていかねばならぬものなのだ。`毒を食らわば皿まで`ということわざがある。一度毒を食ったら、どうせ命はないのだから、ついでに毒をもった皿までなめるという譬えから、一度悪事たどを犯したからには、とことんまで悪事を重ねるといふ意である。学問であれ何であれ、悪事ではなくても、すべて毒を孕んでいる。というより、毒に触れるところまで何事も突き入って初めて、なにか事をなしうるのであって、程よ

いところでまとめ上げられた学問なんぞ、糞の役にも立たない。折口は自分の学問を継承する気があるなら、自分の学問に流れている毒を食らう覚悟があるかと突き迫っているのだ。「魂と魂が歩みよって、触れ合った瞬間、人は感電したようなショックを受ける。」と白洲がいうとき、魂と魂が触れ合うためには、まず肉体と肉体が触れ合うところから始まらなければならないということなのである。

折口に関するこのエピソードに限らない。新約書のイエスと弟子たちの関係についても当てはまるが、聖書や教科書のように一線を画さずに容赦なく読み破っていくなら、随所に頭を抱え込んでしまう際どい場面がみられる。毒が張り巡らされているのだ。イエスの前で弟子たちは何度も立ち往生するが、読んでいるこちらにも同様に立ち往生してしまう。そして次に躓いている弟子たちの一人一人の哀しみがこちらに突き刺さってくる。白洲は折口の「切なさがよくわかるような気がする」というが、私はそこで躓く折口の弟子の哀れな心情も「よくわかるような気がする」。そんなところまで踏み入る気は毛頭なかったし、そんなつもりで弟子になったわけではないのに、折口は決定的なことを口にするのだ。「わたしのほんとうの思想を伝わらない」と。弟子を続けるなら、折口のいうことを聞くしかないというよりも、そこに越えがたくくつきりと浮かび上がっている深淵の前に立ち尽くしながら、生きていく人のやるせなさに私は心打たれる。

折口信夫に触れるなら、南方熊楠についても書かないわけにはいかないといわんばかりに、熊楠を詳しく取り上げ、彼の「浄の男道」に目配りしているのも、白洲正子の自在な面白さである。熊楠といえば、記憶力抜群で十何ヶ国の外国語に精通する稀代の人物だが、たとえば、「昭和6年8月20日午後5時書き始め11時55分了り、さっそく差し出す」とある手紙にしても、《書きはじめると一日でも二日でも止どまることを知らず、たとえば右の手紙でも、書きはじめたのは8月20日午後5時であっても、終わったのはその夜ではなく、翌日の11時55分ではなかったか。昼間でなければ「さっそく差し出す」ことはできなかつた筈である。》という疑問がたちまち湧き上がってくるほどの、エネルギーな男であった。

岩田準一という男色研究家に与えた先の手紙の初めの方に、「浄愛（男道）と不浄愛（男色）とは別のものに御座候」とあるのに白洲は目をつけ、古今東西の積み上げられた熊楠の知識の山を掻き分けて、「浄の男道」を辿っていく。「明和のころすでに芝居役者にすら専門に育て上げられたる若衆形は全滅し、女方が平井権八や小姓の吉三をつとめ候。それでは女になってしまって、若衆や小姓の情緒はさっぱり写らず。」と手紙にあるのに触れて、白洲は《歌舞伎の女形も男であるのに、「それでは女になってしまって、若衆や小姓の情緒はさっぱり写らず」といっているのは面白い。このことは単なる女々しい男と、男の精神を持ちながら女のような美貌をそなえた若者とをはっきり分けて考えていたことを示して》いると、いよいよ核心に入っていこうとするが、熊楠は別に「浄の男道」についてまともにも語っているわけではない。

熊楠 20 歳のとき、渡米前の心友長男の羽山繁太郎、次男蕃次郎との 40 数年前の別れに筆が進んで、《朝霧の中を長男の繁太郎とともに出立した》ときの、「かの長男日高河畔（清姫が衣をぬぎ柳の枝にかけて蛇となり、川を遊あそびにかかりしという天田あまたという地）まで送り来る。いわゆる君を送る千里なるもついに一別すで、この上送るに及ばずと制して幾度も相顧みて、おのおの影の見えぬまで幾度も立ち止まりて終つひに別れりし。」という部分に、《熊楠が愛していた青年と、日高川で別れる場面が何ともいえず美しく、朝霧にまぎれて東と西に消えて行く二人の姿が、「幽玄」とはこういうことをいうのかと、長く私の心に残った》のに、いま読んで《昔思ったほどの感動は得られな》といいいながらも、白洲はそこに「浄の男道」を見出そうとする。

《万感のおもいをこめて、かの念友の繁太郎と日高川原で別れた時のことしか書いていないのだが、私たちの想像を掻きたてるには充分すぎる程の情緒にあふれている。すなわち彼ら二人の兄弟とは、おそらく肉体関係はなかったこと。なかったために死んだあとまでも忘れることができず、生前と同じように、あるいはそれ以上に、夢の中でいっそう濃密に付合うことができたのだと思う。》そして、《極端なたとえではあるけれども、熊楠の称えた「浄の男道」とは、中世の英国の騎士ナイトたちが、主君の夫人や姫君を、理想の女性に見立てて渴仰した風習によく似ていると思う。》

熊楠に欠かすことのできないのは粘菌研究であり、白洲も当然ながら粘菌に言及するが、それも「両性具有の美」においてである。《熊楠の書簡を読むと、「浄愛」とはけっして生きている人間だけに関するものではなく、その一家全体に及ぶ愛惜の歴史と呼んでも差し支えないように思われる。それ以上に、世の中のありとあらゆるものは、因果関係によって結びついており、時間・空間を超越して、熊楠のもの見方に浸透していたのではあるまいか。》おそらく熊楠は「浄愛」の原形を粘菌に発見したのだ。動物にも植物にも属さない、というより動物でもあれば植物でもある粘菌は両性具有どころではなく、それ以前の生物そのものの分類を超越してしまっているところに、熊楠はあらゆる生命の源を見出していたにちがいがなかった。つまり、粘菌として人間を見つけだして、それを研究するだけでなく、粘菌のように生きることをたえず願っていたのが感じられる。

粘菌の「輪廻」的ありかたについて、白洲は簡潔に説明している。《はじめはアメーバのように、倒木や落葉の下でカビやバクテリアのようなものを食べて生きている。ねばねばした液体状の形なきものでありながら、多くの核を有しており、湿った土の上を網目のように這いずりながら成長して行く。

この状態を熊楠は「原形体」と呼んでいるが、ある日、突如として目覚め、「日光、日熱、湿気、風等の諸因縁に左右されて」その原形体の分子どもが、茎となり、胞子となり、或いは胞壁となって地上にあらわれる。それらをつなぎ合せている糸状のものが、日光や風のために乾いて折れる時、胞子が散乱して土に定着し、別の原形体となって繁

殖しはじめるのである。

それはよく晴れた日の午後から夜にかけて短時間のうちに行われる極めてドラマティックな見ものである。人はさまざまの色の茸の形をしたものを見て、「それ、粘菌が生えたぞ」と喜ぶが、それらは既に死物と化したもので、ただ胞子を飛ばすための風を待っているにすぎない。

そういうとさも珍しい生きもののように思われるが、その気になって探せば森の倒木や落葉の中で容易に見出すことのできるありふれた生物で、熊楠は196種の粘菌の目録を製作したという。

もっとも興味があるのは原形体が変身して、茎や胞壁、胞子を作りはじめた時に、大風や大雨に会うと、忽ち元のねばねばした原形に戻り、木の下や葉の裏にかくれて、天気がよくなると再び起き上って胞嚢を作ることである。前にもいったように原形体は盛んに這いまわって物を食べ歩くが、茎や胞子その他ができ上がった後は少しも活動しない。ただ好い機会が来るのを待って飛散しようと身構えているだけだ。それはもう生きているとはいいがたい。人は死物を見て活物と思い、茸の形に固まろうとした原形体が、またお流れになって液体状のものに還元する時、粘菌が死んだと思うが、実は生き返って活動しはじめたことになる。したがって、外観上の死と生は、粘菌の場合正反対のものなのである。》

いよいよ白洲が念願としていたらしい世阿弥に行きつくが、「両性具有の美」というテーマはすでに輪郭が融解しつつあり、その中から仄かに揺らめいてくる言葉を掬い取ってみる。「至花道」で世阿弥は「児姿は幽玄の本風也」といい、《その後、児姿を物真似の老、女、軍の三体に移して、舞歌をすれば、自然に幽玄な美しさが表れるに違いない。》として、白洲によって老体、老舞が説明されるが、注目されるのは「女体」についての説明である。

《次は女体で、これは「体心捨力」を旨とする。心を主にして、全身の力を捨てる意味である。「幽玄の根本風とも申すべきか」と、ここでまた「幽玄の根本風」という言葉が出てくるが、「児姿の本風」と違うのは、前者にはもう少年の美しさは失せており、いわば人為的に少年の頃の美しさを復活させねばならない。(中略)

男が女に扮装してなおかつこのように無心でそこはかとない風情を表現するのは容易なことではない。面をつけるからいくらか助けにはなるだろうが、それにつけても身体を持ちようを根本的に変えなければ女にはなれない。そこに「体心捨力」という技が生れた。世阿弥が口をすっぱくしていった「初心忘るべからず」という言葉も、ただ漫然と初心に還れ、ということではない。そんなことは誰にもできはしないのだ。彼がいつているのは、若い時の初心を身体に叩きこんでおけば、身体が覚えているという意味で、そこには気持とか心といったようなあいまいなものは一つもない。花の種を一生身につけていれば、いつでも取り出して見せることができる、と知っているのと同じことである。》

途中で、衛生放送で見た映画『カストラート』も挿入される。この映画は《ファリネッリと呼ぶイタリー人で、18世紀にナポリの片田舎で生れた実在の人物》に基づいて描写しており、研究書によると、《音楽のために去勢が行われるようになったのは12世紀のスペインで、イスラム教の文化によってカトリックでも重要な地位を占めるようになった。16世紀から18世紀へかけてがカストラートの最盛期であり、教会側の言い分によると、天使の声をもって神に仕えるから許されたという》。

《去勢の手術をうけるのはふつう8歳から12、3歳までで、当時は衛生事情も最低だったから、命を落すものもいたという。手術をする時は牛乳の風呂につけて、阿片を飲ませて痛みを軽くするそうだが、本人はおそらく何をされているのかははっきりとは解らなかったであろう。一個の男性として、それを恥辱と感じるのは大人になってからで、ファリネッリは少年の時に、親友のカストラートが自殺したのを見てショックをうけた。カストラートにとっての通過儀礼^{イニシエーション}である。その後は度々夢でうなされたり、少し気が変になるが、その度に現れるのは牛乳風呂と阿片の匂いで、阿片の常習者になりかけるのを兄のリッカルドが必死になって止める。彼にとっては阿片の甘さより、名声の誇らしさの方が魅力だったのである。》

貧しい9歳違いの兄弟は一卵性双生児のようで、《リッカルドは弟の声に天才的な美しさを発見し、自分はその声を生かすべく影の人として生活することに徹し》ながら、《たとえば一人の女性がファリネッリに現つをぬかしてベッドを共にすると、前半は弟の仕事で、後半はリッカルドが受け持つという》具合であった。彼らが挑戦したのは、ファリネッリを自分が任されていた英国の王室劇場へ誘惑した世界のマエストロ・ヘンデルと、天上の神であった。ファリネッリは自分の美声に無関心な人々を虜にしなが、名声を得ていくが、やがて音楽に対する考えかたの相違から兄弟は対立し、兄は消え去り、《ファリネッリは歌わなくなり、ヘンデルの音楽に魂が入って、みんないなくなった後にヘンデルの作品だけが残った。》白洲はファリネッリと、《はるかに穏やかで閑かな》天上界の住人を創造してみせた世阿弥との隔絶を感じながらも、しかし、《犠牲者であることにおいて、目で見るとの違いはないこと》に想いを馳せる。そして彼女は次の感想を書きつけて、自らの文章を締め括る。《それにつけてもこの頃の新宿2丁目あたりのおかまは、私が昔知っていた人たちとどこか違う。もっといえば、真物のおかまは室町時代で終わったのだと思う。私がごたごた書くよりも、次のひと言が何よりもそのことをよく語っている。古いおかまの友人の一人に訊いてみると、言下にこう答えた。「そりゃ命賭けじゃないからよ」》

映画『ハッシュ！』を観ると、ゲイであることが「命賭けじゃな」くなっている時代であることは大変いいことで、もし白洲正子が生きていたら、この映画についての感想を聞いてみたかったとつくづく思う。

2002年6月2日記